



つながろう

CO・OPアクション情報

2011年12月21日

第9号

◆最後まで、支援を続ける



京都生協・生産と消費を
結ぶコーディネーター
地産地消推進担当
福永 晋介氏

私たちは、宮城県漁協志津川支所が完全に復興するまでの継続した支援を目指しています。カキ養殖の本格復興だけでも3年はかかるそうです。復興したら、今度は志津川で獲れた魚を京都で産直品として売りたい。この交流を途絶えさせずに続けていきたいです。

このボランティアは、私たちだけでは何もできませんでした。ボランティアをしたいと思っても、その入り口を見つけることは簡単なことではありません。それを、みやぎ生協さんの協力により、実現してきました。感謝しています。また、これらの活動費は、カンパ活動や支援朝市などを通じて独自に集めてきました。大変ではありますが、自分たちの活動だという意識を持ち、今後も支援を続けていきます。

宮城・志津川へ、みんながついたお餅を贈ろう！



京都生協本部では、約90人のボランティアが参加し、5,000個の丸餅を作った。

京都生協職員ボランティアは、宮城県漁協志津川支所への継続したボランティア活動を行っており、11月27日には、京都生協本部（京都市）で「支援餅つき大会」が開催されました。この餅は、12月3日に、志津川支所と同支所の漁師の方が多く移り住む登米市の仮設住宅で行なう炊き出しで配られるものです。

餅米は同生協の取引先で、復興支援活動においても協力関係にある鳥取県畜産農協が「正月には被災地で餅を食べてもらおう」と、地域の子どもたちと一緒に田植えをするなどして思いを込め育てた300kgです。炊き出し当日に南三陸町志津川でつく60kgを取り分け、舞鶴と丹後の会場で60kg、本部で180kgをつきました。本部では約90人の参加者が朝9時から昼過ぎまでかけ、5,000個の丸餅を作りあげました。

会場では、京都周辺に避難されている東北の方々を招いて、つきたての餅がふるまわれました。被災地支援の様子を撮影した映像も流され、京都で暮らしながらも故郷を身近なものとして感じ続けるための工夫も見られました。



登米市の仮設住宅では、約650人が訪れた。

宮城県での炊き出し活動実施

12月3日、京都生協は鳥取県畜産農協とみやぎ生協のボランティアの皆さんと共に宮城県南三陸町志津川にて餅つきを行ない、志津川と登米市の仮設住宅の2カ所で、汁餅やバーベキュー、焼きそばを提供。また、京都でつきた餅の配布も行ないました。温かい炊き出しに笑顔がこぼれていました。